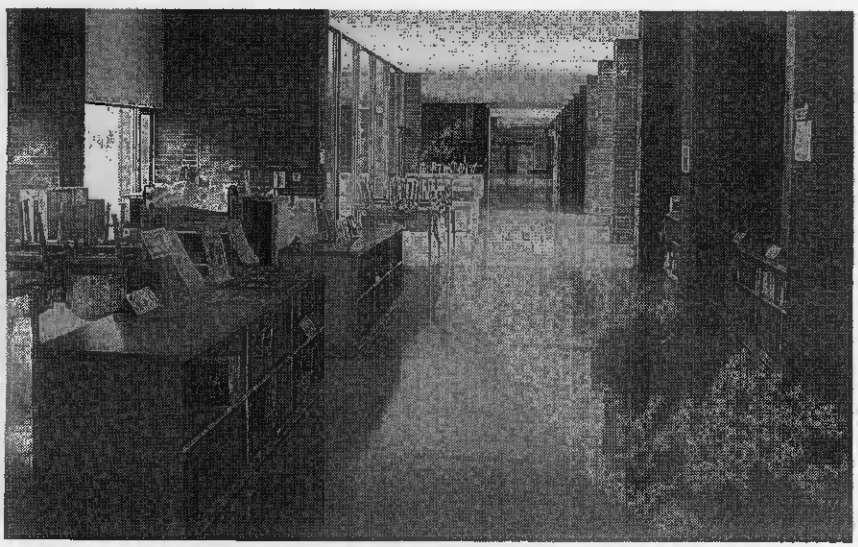
# 開放的なホール設計に

## 北海道小樽高等支援学校

## 図書館同好会が活躍

### コミュニケーション力を向上



一直線に長いギャラリー棟の一角にある開放的な図書館

○学校図書館の始動

平成21年に開校した本校は、知的障がいをもつ約180人の生徒が、職業教育をとおし、社会的自立に向けた力を高めていけるようにと、作業学習を教育課程の中心に据える単一課程の特別支援学校高等部である。開校3年目、現在地に新校舎が完成し、生徒玄関から一直線に長いギャラリー棟の一角に、これまでのように独立した教室でない、開放的なホールとして図書館が設置された。

仮校舎で購入したわずかな本を分類して配架し、利用規程やオリエンテーションを行った。6月に開館すると毎日たくさんの生徒が閲覧に来た。新刊購入計画に、年度予算が追いつかず、不足分は新聞社の寄贈図書や、出版社の懸賞の当選図書、蔵書選定基準を設けて職員からの寄贈を募って補った。そうして丸5年を迎えた平成27年度に、蔵書はようやく1千冊に達した。

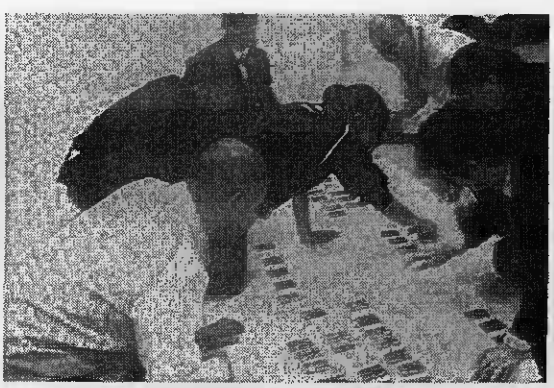
○生徒の活動から

開館と同時に生徒の委員会活動が始まり、生徒が貸し出し当番を担当し、朝読書や新刊の紹介、ポスター作成などの活動をとおして利用拡大を図った。職員協力のもと始動させた図書館が、生徒の力で稼働し始めた。

26年度は、図書館同好会が結成された。決して読書愛好家集団ではないが、図書館の居心地が好きだという7人が集まり、季節ごとに館内装飾をした。春には校庭で摘んだ花を大型本を利用して押し花にし、しおりを作って読書週間にプレゼントした。冬には窓ガラス越しに見えるよう雪だるまを作った。小説や4コマ漫画を書き、おすすめ本紹介コーナーを掲載した会報誌を発行した。見よう見まねで始めた百人一首でイベントをしたいと参加者を募り、「みんなで日本の古典に触れよう!」と全校百人一首大会を開催した。

図書館の心地よさを、もっとたくさんの人に知ってもらおうと、読書だけにこだわらず、本に関わるイベントを自分たちで企画し、図書館の心地良さを広げようとした。

今年度2回目の全校百人一首大会は、人とコミュニケーションをとるのが難しい生徒や、障がいの特性からか勝ちにこだわる生徒も、教員を交えたチーム編成にすることで、昨年度を上回る参加チーム数で大盛況に終わった。また、ブックシェアリング活動に参加したいと、自分たちで作成したチラシを学校周辺の住宅街に配布し、古本回収の協力を要請。集まったもののほこりを払い、分類分けして、本のリユース活動を展開する一般社団法人「北海道ブックシェアリング」に依頼し、東北被災地に寄贈する活動に参加した。地域の力を借りて1千冊以上集まった本の数と、陸前高田の仮設図書館へ寄贈することで、「一人ひとりの力は小さくても、皆が協力して活動することで、自分たちも何か人の役に立てる」と、奉仕活動を通して生徒それぞれに意識が芽生え、自己有用感につながった。



全校百人一首大会を開催

○今後の学校図書館

昨年度入学した読書家の1年生が、「中学では普通学級の生徒がいると入室もままならず、図書館を利用したくてもできなかった」と不自由さを告白し、「ここの学校に入学して、いつでも図書館が利用できるようになった」と、満面の笑みで語ってくれた。

発達障がいや学習障がい、自閉症を併せもつ生徒も多い本校には、読書家も多い。ニーチェや村上春樹を読む生徒から、絵本や詩集を朗読する生徒まで、利用図書の幅は広い。週2回の昼休みと放課後わずか15分間ずつでも、昨年度は1500冊以上の貸し出しがあった。しかし読書にこだわらず、図書館は人とコミュニケーションをとる場として、一人でそっと心落ち着かせられる場として、それぞれの生徒の心潤す大切な空間になっている。

ここ数年、道内には特別支援学校高等部が毎年新設されている。しかし図書館研修会には支援学級担当者はいても、支援学校の図書館担当者の参加はまだ皆無に等しい。十数年この仕事に携わってきて、生徒の心の育成を目指す特別支援学校にこそ図書館は不可欠なものと考える。学習活用や余暇活動の充実のための読書もさることながら、言語活動の充実やコミュニケーション力の向上に、そして生徒の心潤す居場所として重要である。今後もより多くの担当者と研修の場で切磋琢磨しながら、道内のどの学校にも充実した図書館が作られていくよう、生徒の活動の支援に一層尽力していきたいと考える。

（文責・小野薫図書館司書）

同校＝〒047―0261北海道小樽市銭函1―101／TEL0134（61）3400。